

誰かが見ている

「分」を知る者は誠実な人である。誠実な人は心にやましいところが無いから余計な心配をしたり、恐れったりすることなく、いつも正々堂々と生きることが出来る。したがって、真の勇者となれる。

渋沢栄一は、「もしその人に手腕があり、優れた頭脳があれば、たとえ早くから有力な知己親類がなくても、世間が閑却してはいない」（「自ら箸をとれ」『論語と算盤』）と語っている。誰かが見ているのが世の中の不思議なことであり、本当に困った時には誰かしら手を差し伸べてくれるのが世の常である。その人に手腕があり、優れた頭脳があれば尚更である。

誰かが見てくれているということを信じて、紙一重の積み重ねを日々行うことが大切だということを忘れないでほしい。上辺だけ調子よく振舞っても、見る人が見れば分かる。目先の人の目を気にし、その時々を上手に振舞っても、自分の心に積み重ねがなければその人は大成しない。「陰徳あれば必ず陽報あり」を信じて、目先の評価に惑わされることなく、倦まず撓^{たわ}まず、「昨日の自分よりも今日の自分」と不断の進歩を重ねることが自分を大きくする道である。

紙一重の積み重ねの具体例として、一つは、毎日寝る前に今日一日の出来事を思い出すこと。反省の物差しは「あるべきようにしたか」であり、自分の言動を反省し、周囲の助言に感謝するのである。それは、自覚的に生きることに通じる。二つ目は、その時々で職場で、「これだけはやった」と後々に思える仕事をする。自らの積み重ねを後日に実感すること、即ち、自分の人生の時間に悔いを残さないことであり、また自分自身の自信を深めることに通じる。三つ目は、「自分であればこう判断する」という目で上司や同僚の判断を見ること。一人の経験は微々たるものであるから、他人の経験を追体験することによって積み重ねを大きくすることができる。

紙一重の積み重ねをする者としらない者との差は、日々見えるものではない。しかし、10年経つと差が出てくる。紙一重の積み重ねを行った者は自然と目立つようになり、そうでない者はどこかに埋没して関心を惹くことがなくなる。さらに10年という月日が人を選別し、最終的に経営者が選ばれるのである。

ところで、誰かが見ているということは、常に誰かに見られているということでもある。常に見られている自分であることを意識して、自分の行動に怠^{おこた}りがないように心掛けることが大切である。

豊臣秀頼に仕えて大坂夏の陣で討死した木村重成は、討ち取られた自分の首が人前に晒^{さら}されることを考え、髪に香を焚き込んでいた。重成の首を見た徳川家康が「勇士のよい嗜み」と賞賛し、後世にも武士の鑑^{かがみ}として仰がれた人物である。その重成は戦いの前から食が進まなくなっていた。憂^{うれ}いた妻が「今回は落城が近いとの風聞がありますのでお食事が進まないのでしょうか」と問うと、「いや、全くそうではない。昔、後三年の戦いに瓜割四郎という者がいた。臆病^{のど}で朝の食事が喉を下らず、敵陣で首を射切られた時、その傷口か

ら食事が出て恥を晒^{さら}したという。この度は私も敵に首をとられるであろう。死骸が見苦しくないようにと心掛けて食事を慎んでいるのだ」と答えたという。

企業人は常在戦場の日々を過ごしている。その日々を漫然として過ごすのではなく、この木村重成のような心掛けを持ち、自分を律しながら過ごしたいものである。